

あゝ市ヶ谷台

陸軍士官学校の栄光と悲劇

菊村 到

あゝ市ヶ谷台

陸軍士官学校の栄光と悲劇

菊村 到

双葉社

〈著者略歴〉

菊村 到 (きくむら いたる)

大正十四年五月神奈川県平塚市に生れる。早大英文科卒。
昭和二十三年四月読売新聞社入社、以後九年半社会部、
文化部に勤務。『硫黄島』で第三十七回芥川賞受賞。
主な作品『あゝ江田島』『こちら社会部』『遠い海の声』
『提督有馬正文』ほか多数。

あゝ市ヶ谷台

(検印廃止)

600 円

昭和46年8月15日 初版発行

著者	菊村到
	東京都世田谷区桜3-32-6
発行者	瀬川雄章
発行所	株式会社双葉社
	東京都新宿区神楽坂1の8
	(郵便番号 162)
	電話東京(268)5111(代表)
	振替 東京 117299
印刷所	慶昌堂印刷株式会社
	東京都文京区水道2-4-26
製本所	株式会社川島製本所

落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえします
0093-500010-7336 ©菊村 到 1971

目次

自決の時——杉山 元ほか 3

密使海を渡る——明石元二郎 61

最初に飛んだ男——徳川好敏 121

悲しき暗殺者——相沢三郎 151

後に続くものを信ず——若林東一 173

おとなしい将軍——本間雅晴 205

最後の元帥——杉山 元 235

インパール挽歌——牟田口廉也 265

南に消えた男——辻 政信 285

裁かれた宰相——東條英機 305

あとがき 350

装帧
依光
隆

自決の時——杉山 元ほか

その日、私はある編集者と仕事の打合わせがあつて、赤坂のテレビ局に近い喫茶店に出かけた。

そこで編集者とおちあうことになっていたのである。

道路の混雑のせい、あるいはほかの事情からか、編集者は約束の時間を二十分過ぎても現われなかった。

もし、何かの都合で、来られない時は電話の連絡があるはずだと思い、私はもう少し待ってみることにした。

ウエイトレスか、

「Kさん、いらっしゃいますか。お電話です」と叫んだ。

それは、まさに叫んだという感じてあつた。私は反射的に立ち上った。

Kさんというのは、私の名前だったからである。

私は電話口に出た。

電話の相手は、私が待っている当の編集者で、遅れたことをしきりにわび、もう二十分ほど待つてほしいと言った。

「どうぞ。気になさらずにゆっくりおいて下さい」

私は電話を切り、席に戻った。

席につき、コップの水を一口飲んだ時、不意に一人の人物が私の目の前に現われた。

「失礼ですが、Kさんですか」

彼はそう声をかけたのである。

中年の色の浅黒いたくましい体つきの紳士だった。

その顔に見覚えがあるような気がしたか、思い出せなかった。

「先刻から、Kさんじゃないかな、と黙っていたんですか、人違いしては失礼と存じ、黙っていません」

男はそういった。

それが今のウエイトレスの呼びかけで、私がKであることを確認し、声をかける気になったのだという。

「私、だいぶ前、若林中隊長のことでお目にかかったことがあります」

そう言われて、私は記憶の糸をたぐりよせることが出来た。

私は数年前、ある雑誌に若林東一の伝記を書いたことがある。

伝記といっても、原稿用紙三十枚程度の短いもので、若林東一の生涯を委曲をつくして描きあげるといふわけには、とてもいかなかった。

若林東一といっても、今の若い人には全く耳新しい名前であるに違いない。

年輩の者でも若林東一の名前を知らない人は、決して少なくないだろう。

若林東一中尉は陸軍士官学校の五十二期生で、陸士をトップで卒業した秀才である。

彼は香港攻略戦で大胆な奇襲作戦を敢行し、大いに名をあげたが、のちにカタルカナル島に赴

き、

「後に続くものを信ず」

という言葉葉を遺して敵陣に斬り込み、壮烈な戦死をとげたのである。

彼を有名にしたのは、この「後に続くものを信ず」という言葉であった。

私はこの若林中尉の伝記を書くために、何人かの人に会って取材した。

今、喫茶店で私に声をかけた男は、若林中尉の数期後輩で若林中尉とは面識はなかったが、取材のためにいろいろ便宜を図ってくれたのであった。

私は、仕事の上で世話になった人の顔を、咄嗟に思い出せなかった自分を多少恥ずかしく思った。

顔を見ても思い出せなかったくらいだから、私は彼の名前も失念していた。

「失礼ですが、お名前は何とおっしゃいましたっけ」

私は恥ずかしかったか、そう訊いた。

「Mです」

彼は少しも気を悪くしたふうもなく、おだやかな微笑を浮べた。

Mは現在、建築家でこの近くに事務所を持ち、ときどき息抜きに喫茶店に一人でお茶を飲みに来るのだと言った。

「仕事の関係である人を待っているんですが、まだ時間がかかるようなんです。よかったら、お喋りしましょう」

私は言った。

「お邪魔でなかったら」

Mはにこにこしながら言った。

と言つても、私とMとは住む世界も違い、特に共通の話題があるわけではなかった。すると、Mは、

「三島由紀夫さんの事件はショックだったでしょう」と切りだした。

三島氏と私とは、同業であり、しかも同じ大正十四年生れである。

私がこの事件から強いショックを受けたのは当然である。

ついでに書くと、大正十四年生れの物書きというのは、どういうわけか、余りいない。十三年生れは、かなり多いのだが、十四年生れは少ない。

私の知る範囲では、私のほかは三島氏と田中小実昌氏くらいのものである。

先日、あるパーティで田中氏と会った時、そういう話が出た。

「本当なら、大正十四年生れは兵隊に行かなくても済んだんだよ。徴兵の年齢が満二十歳から十九歳に繰上げられたおかげで俺たちは兵隊にとられちゃったんだ」

田中氏はそう言った。

実を言うと、私はそういうことも忘れていて、その田中氏の言葉で、なるほど、そう言われてみれば、そうだった、と思ひ出したのである。

田中氏は甲種合格で、入営するとすぐ支那大陸に持って行かれてしまったという。私は、陸軍特別甲種幹部候補生という新しく生れた制度に志願し、第一期生として合格した。合格した、と言うと偉そうに聞えるが、下級将校を即席に、しかも大量に生産しなければならぬという情勢に応じて作られた制度であるだけに、応募した者は殆ど合格してしまったのである。

私は田中氏とは違って外地には行かなかった。

従って直接、戦火をくぐり砲煙弾雨を浴びたという経験はない。

見習士官の時、終戦を迎え、すぐ少尉に任官した。いわゆるポツダム少尉というやつて、つまり私は、わが国陸軍最後の少尉の一人ということになる。

三島氏は大正十四年の一月生れてある。

田中氏はたしか四月で私は五月である。

つまり三島氏は生れた年は同じだが、学齢は私や田中氏よりも一学年上になるのである。

それは、三島氏は年齢的には当然、軍隊経験かなければならぬことを意味している。

だが、三島氏は軍隊を知らない。

入営したが、健康診断ではねられて即日帰郷になっている。

軍医の誤診だったという説もある。

三島事件のあと、NHKTVを見ていたら、中村光夫、有馬頼義、草柳大蔵の三氏が事件をめぐる座談会に出席していた。

その時の草柳氏の発言によると、若い頃の三島氏は喘息に悩まされていたという。もし、そうであるならば、三島氏が即日帰郷になったのは、喘息のためだと思う。

私か陸軍特別甲種幹部候補生（当時はこれを特甲幹と呼んでいた）に採用され、仙台陸軍予備士官学校に入った時、甲種合格間違ひなし、と思われるほど立派な体の大男が、喘息のために即日帰郷になった例を知っている。

当時の感覚では、即日帰郷はきわめて不名誉なこととされていた。

入営する時には、親戚知人の歓呼の声に送られ、生きては帰らぬ覚悟で家を出る。

それが、即日帰郷となつて、その日のうちに帰されたのは、世間に対して面目が立たない。だから、即日帰郷になった者は、知人の眼に触れぬようにこっそり帰宅したり、一時どこかよそに身を隠したりしたものである。

しかし一方、合格した連中は、即日帰郷組がうらやましくてたまらなかつたのも、事実である。

三島氏の心に、この即日帰郷は深い傷あとを残したであろうことは想像し得る。

三島氏は即日帰郷になったために、戦争、あるいは軍隊から疎外された場所で、彼自身の美学をひそかにはぐくむことになった。

戦争からも疎外されたという事実が以後の三島氏のコンプレックスの核になったのではあるまいか、と私は考える。

さらに推理を進めてみれば、もし三島氏が即日帰郷にならずに軍隊という組織の中に投げこま

れ、徹底的にもまれ、きたえられていたら、今度のような事件は起らなかったのではないか。

少なくとも私はそう考えるのである。

私はMにそういう私の感想を喋った。

「それは充分、考えられることですね」

Mはそう言った。

私は、

「Mさんはあの事件についてどう考えますか」

と訊いてみた。

Mは暫く考えていたか、顔を起すと、私の眼をじっと覗きこんだ。

それからゆっくり口をひらいた。

「こんなことを言うと、あるいはひとから笑われるかもしれませんが、私は三島さんは、市ヶ谷台にさまよう怨念にひきよせられたのではないかという気がするんです」

その時、私はMの眼かきりと異様な光を放つのを見たように思った。

そのMの眼は、彼の言う怨念の影をやどしているかのようにであった。

「怨念？ 怨念ですか」

私はそう問い返さずにはいられなかった。

確かにMの発言は、奇妙に響いた。市ヶ谷台の怨念という言葉が、具体的に何を示すのかも私には理解出来なかった。

「江田島と言えば海軍兵学校のシンボルであるように、市ヶ谷台というのは陸軍士官学校の象徴なんです」

Mは言った。

さらにMは、昭和史の源流の一つは、市ヶ谷台に発していると言った。

市ヶ谷台は例えば、五・一五事件、二・二六事件などのような動乱の震源地の一つでもあったわけである。

東條英機もここから巣立っている。

戦後、東京裁判の法廷は市ヶ谷台の陸軍士官学校あとに設けられた。

東條英機は、自分が軍人としてはぐくまれたそのいわば故郷で、裁かれ、そして処刑された。現在は陸上自衛隊が使用している。

その陸上自衛隊東部方面総監部総監室で三島由紀夫は自決した。

「あの時、自決に立ち合った益田兼利東部方面総監の態度は実に立派だったそうですね」

Mはそう言って私を見た。

Mはちょっと間をおいてから再び言葉を続けた。

「それには理由があるんです。益田さんが市ヶ谷台で自決に立ち合ったのは、実は今度で二度目なのです」

その言葉は、私を驚かした。

はじめ私は、Mかそれを一つの比喩として言っているのだらうと思った。

しかし、そうではなくて益田氏は、実際に二度、自決に立ち会っているのがあった。

その時、自決したのは大本營陸軍部作戦課の晴氣誠少佐である。

晴氣少佐は、陸士の第四十六期生で、益田氏とは同期である。

彼はマリアナ海域の作戦を担当していた。

そのマリアナが落ちた時、彼は深いショックを受けた。

作戦担当者としての責任を感じて、思い悩むようになった。

彼が心中ひそかに死を決意したのは、この時からであつたらしい。

彼は武人としての最期を全うして敗戦の責めを果そうとしていたが、機会にめぐまれず終戦を迎えることになった。

八月十七日の未明に晴氣少佐は、同期生として親しかった益田氏に、

「俺はどうしても自決する。貴様、立ち合ってくれんか」と懇願した。

晴氣少佐の死をねかう気持は益田氏にも痛いほど分る。

しかしこの得難い人材をみすみす死に追いやることには耐えられなかった。

益田氏は晴氣少佐に翻意を促し、何度も説得を試みた。

しかし晴氣少佐の決意を動かすことは出来なかった。

そうである以上、彼の願いを聞き入れて、自決に立ち合つてやるのが、親友の道であろうと益田氏は考えた。

晴氣少佐は益田氏の眼前で割腹し、さらにみずから拳銃を撃ちこんで自殺したのであった。その同じ市ヶ谷台で、二十五年後、三島氏が益田氏の眼前で自決したのである。

晴氣少佐は自決の際、遺書を残している。

その遺書には、

「地下に赴いて幾万の靖国に眠る勇士と、戦火に斃れた同胞にお詫び申上ぐるが、予の道」という文章がしたためられてあったという。

これとは別に夫人あてに書かれた遺書もあった。

そこには次のように書かれていた。

「予が亡きあと、予が遺したる三子とともに、更に嶮しき荊の道を進まんとする貴女の前途に神の御加護のあらんことを祈る。予の、魂また、共に在らん」

終戦時には、実に多くの将兵が自決している。

海軍ですぐ思い浮ぶのは、大西滝治郎と宇垣纏であろう。

大西は当時、軍令部次長だったが、渋谷の自邸で割腹し、果てた。八月十六日のことである。

宇垣纏の場合は、自決というのとは少し違う。

宇垣は第五航空艦隊の司令長官として大分基地で沖繩特攻作戦を指揮していた。

八月十五日に艦爆機に乗って沖繩の敵艦めがけて飛び立ち、そのまま帰らなかった。

死を以て、沖繩特攻作戦の最高指揮官としての責めを果たしたのである。

陸軍大臣阿南惟幾^{これちか}が三宅坂の陸相官邸で自決したのは、玉音放送の前の八月十五日午前五時三十分である。

阿南はラジオの玉音放送を聞くに忍びない、ということ、十五日の未明を自決の時に選んだのだった。

自決する前に彼は綾子夫人の実弟の竹下正彦中佐と最後の酒をくみかわしている。

もちろんこの時、すてに竹下中佐は阿南陸相が自決することは知っていて、

「余り飲みすぎすと、手もとが狂いますよ」

と言っている。

それに対して阿南は、

「飲んだほうか血のめぐりがよくなる。出血多量で却ってうまくいくさ」

と笑い飛ばした。

自決する時、阿南は昔、彼が侍従武官をしていた頃、天皇陛下から下賜されたワイシャツを肌につけた。

そのワイシャツノは天皇のおさがりであり、天皇がかつて身につけていたものを、彼自身肌にとって割腹したのである。

彼は自分の手で腹を裂き、さらに喉を切った。

陸軍省から副官の小林四男治中佐か飛んて来て介錯したという説と、すでにその時は絶命して介錯を必要としなかったという説と二つある。